

# もくれん

園長のコラムから

## 2001年度 卒園文集から

ご卒業おめでとうございます。

私にとっては、あつというまの一年でした。園長として何程のことができたのかと反省することしきりです。でも、子どもたちと過ごした日々を思い起こすと、楽しかったなあと、感謝をもって言うことができます。

これを書いている今日は、二月四日立春です。暦の上では今日から春です。ここ水口ではこれから何回か雪が降ると脅かされていますが、でも幼稚園入口の「もくれん」は、この厳しい寒さの中でも確実に、着実にそのつぼみを膨らましています。自然の営みに感動を覚えます。この成長に子どもたちの成長をも重ね合わせて思います。外から見てほとんど分からなくても、内側に蓄えて蓄えて、そして時が来たらパッと開花する子どもたちの成長を思います。

四月、水口幼稚園にやって来たとき、この「もくれん」の花が子どもたちを祝福し、私も迎えてくれたような気がしました。園だよりのコラム欄に「もくれん」とつけたのは、この「もくれん」のように芳しい香りをはなちながら、子ども一人ひとりをありのまま暖かく受け入れができるようにとの願いからでした。

幼稚園入口の妙な場所に立ち尽くしている「もくれん」はこれからもずっとあの場所に立ち尽くしていることでしょう。卒業後も幼稚園に来てくれんを見てください。つらいこと嫌なことがあったら、幼稚園を思い出して来てください。もちろん楽しいことも教えに来てくださいね。

最後に聖書の言葉を贈ります。

わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。（コリントの信徒への手紙Ⅰ三・六～七）

発行日 2009年9月 5日

発行者 水口幼稚園 谷村徳幸

〒528-0028

滋賀県甲賀市水口町城東3-21

<http://minakuchi.jp/youchien/>

## 2002年度年間目標 「こころが育つ」

2002年度の保育の年間目標を「こころが育つ」としました。幼児教育でもっとも大切なことは「根っこ」を育てることです。心を育てると言ってもいいですし、人生の土台（基礎）をつくると言い換えてもいいと思います。いずれにしても外からは「見えない」部分が育っていくことに大人は細心の注意をはらい働きかけをしていくことが大切です。

子どもたちが、できなかったことができるようになつたり、上手に絵や文字を書き、作品を創つたりすると、私たち大人は大いに喜びます。それが子育ての喜びにつながるということも否定できません。しかし、それだけに重きを置いてしまっては本当に幼児期に大切なことを見落としてしまいます。こころが育つとは具体的にどういうことでしょうか。

昨年も紹介しましたが、10年前のベストセラーで『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』という本から引用させてもらいます。「人間、どう生きるか、どのようにふるまい、どんな気持ちで日々を送ればいいか、本当に知っているなくてはならないことを、わたしは全部残らず幼稚園で教わった。人生の知恵は大学院という山のてっぺんにあるのではなく、日曜学校の砂場に埋まっていたのである。わたしはそこで何を学んだろうか。何でもみんなで分け合うこと。するをしないこと。人をぶたないこと。使ったものはかならずもとのところに戻すこと。ちらかしたら自分で後片付けをすること。人のものに手を出さないこと。誰かを傷つけたら、ごめんなさい、と言うこと。食事の前に手を洗うこと。トイレに行ったらちゃんと水を流すこと。（中略）不思議だな、と思う気持ちを大切にすること。（略）」《下線・谷村》たわいのない文章だが、真理があると思います。

「遊び」を通してこういう力が育てられると言

われます。目に見えるところではなく、内面を見据えて、保育にあたってまいりたいと思います。

保護者の皆さんと共に、一年間歩んでまいりたいと思います。よろしくお願ひします。

## 2002年度 卒園文集から

ご卒業おめでとうございます。

子どもたちは、心も身体も大きく成長しました。その成長に驚かされています。園長として何程のことができたのかと反省することしきりです。でも、子どもたちと過ごした日々を思い起こすと、子どもたちに色々なものをもらって「楽しかったなあ」と、感謝をもって言うことができます。

「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」（コリントの信徒への手紙Ⅰ三・六～七）このことばは昨年の卒園文集で贈らせていただいた聖書のことばです。私の力不足にも関わらず、神がしっかりと子どもたちを守り育てて下さったという事実を受け止め感謝しています。子育ての一翼を担っているものとしてこの認識は大切なことだと思っています。

幼児教育は「根っこ」を育てる事だ、と機会があるたびに申し上げてまいりました。「根っこ」が育たなければ芽を出しても枯れてしまいます。風が吹けば倒れてしまいます。実ったとしてもその重さに堪えられるような茎が育ちません。急がずに、いま必要な養分を見きわめ、それを吸し易いようにしっかりと与えていくことが幼児教育における大人の役割だと思います。しかし、「根っこ」は私たちに見ることができません。ですから不安になります。焦ったりもします。でも全神経を集中して子どもをよく見ると「根っこ」が育っているかどうか分かります。

今年度の2月の聖句は「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」でした。「信仰」を「幼児教育」に置き換えてよいと思います。子育ては、希望をもちながら、見えない事実を確かめながらやっていくことだと改めて思われます。見えない事実が大切なのです。

先日、園庭で遊んでいたすみれ組さんにトラブルが起きました。険悪なムードになりましたが、それを自分たちで話し合いながら問題を解決していました。また困っていたり、さびしがっている子がいたら、それを敏感に感じ取り、その傍らで優しく声をかけ、一緒に佇む姿もよく見られるようになりました。あるいは苦手だったことを集中して取り組みそれを克服しようとする姿もあります。感動します。これらが「根っこ」「見えない事実」と関係することではないかと思います。卒園を迎えるすみれ組二五人にはそれぞれに適った「根っこ」が着実に育っていると確信しています。

これから的人生いろいろな困難もあるかも知れませんが、そんなとき保護者の皆様も子どもたちも水口幼稚園を思い起こして下さり、ここにひょこっと顔を出してください。いつも待っています。「根っこ」が育ったところなのですから…。最後にもう一度、御卒業おめでとうございます。

## 2003年度年間目標 「いのち輝く」

ご入園ご進級おめでとうございます。

第一保育期が始まって2週間が過ぎました。子どもたちもずいぶんと園生活になれてきたように見受けられます。今年度はスタートにあたり例年より少しばかり午前保育を増やしました。その成果でしょうか、子どもたちが無理なく園生活に慣れてくださっているようです。「もっと遊びたい」という声が聞こえてくるほどです。ゆっくりと龜のように着実に歩んでいくことの大切さを思っています。

さて、2003年度の年間目標を「いのち輝く」としました。神様からいただいた「いのち」が益々輝くようにとの願いを込めてのことです。職員会で年間目標について話し合っている最中の3月20日午前、僕たちの祈りにも関わらず、米英のイラク攻撃が始まってしまいました。ショックを受けました。戦争で犠牲になるのは、常に女性・高齢者・子ども・しょうがい者など社会的な弱者です。水口幼稚園ばかりではなく、イラクの、そして世界の子どもの「いのち」が決してそこなわれることなく、それを輝かしてくださるようにと祈

りをこめて年間目標を掲げました。

僕は、昨年度の卒園式（3月15日）のあと、保護者の皆さんへの謝辞と共に「アメリカのイラク攻撃が決して実行されないよう、祈りましょう。もし、こんな理不尽なことが実行されたら私たちは教育の現場にいさせてもらっている者として、また大人として、子どもたちにどう説明できるでしょうか…。実行されてしまったら来年度、大人として恥ずかしくて子どもたちの前に立つことができない気分になります」というようなことを申し上げました。にもかかわらず、戦争が始まり、新学期がやってきました。水口の子どもたちの顔と戦時下のイラクの子どもたちの顔がダブって見えてしまいます。とても悲しい気になります。いのちをいとおしみ、すべての子どものいのちが輝くことができるよう、この水口幼稚園で園長としてなすべきことをなしていきたいと思っています。

幼児教育でもっとも大切なことは「根っこ」を育てることです。心を育てると言ってもいいですし、人生の土台（基礎）をつくると言い換えてもいいと思います。いずれにしても外からは「見えない」部分が育っていくことに大人は細心の注意をはらい働きかけをしていくことが大切です。神様によって与えられた一人ひとりの「いのち」がまちがいなく「はなはだよし」とされていることが、幼児期の心にしみこんでくればと願っています。大人も子どもも一人ひとりのいのちが輝いています。そのことに目を向けて保育に携わってまいりたいと心を新たにしています。

保護者の皆様と共に、一年間歩んでまいりたいと思います。よろしくお願ひします。

## 2003年度 卒園文集から

ご卒業おめでとうございます。園長も三年目

水口幼稚園の園長をさせていただいてから三年が経とうとしています。今年の卒園生は、私と一緒にこの幼稚園に入園しました。三年間の子どもたちの心と身体の成長ぶりには目を見張るものがあります。顧みて、私はといえば退化ばかりが著しく……、そんなわけではないでしょうが「私の卒園」は遠い遠い先のようです。園長として何程のことができたかと自省しています。しかし、私

の非力にもかかわらず神様が子どもたちをしっかりと守り育んでくださったという事実を今年もまた強く感じております。

「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」（コリントの信徒への手紙Ⅰ三・六～七）。この聖書のことばを卒園文集で贈らせていただいて三年目になります。私たち人間の力不足や一生懸命さを越えて、神様が責任を持って子どもたちを成長させてくださるということです。子育ての一翼を担っているものとしてこの認識は大切なことだと思っています。

幼児教育は「根っこ」を育てることだ、と機会があるたびに申し上げてまいりました。「根っこ」が育たなければ芽を出しても枯れてしまいます。風が吹けば倒れてしまいます。実ったとしてもその重さに堪えられるような茎が育ちません。急がずに、いま必要な養分を見きわめ、それを吸収し易いようにしっかりと与えていくことが幼児教育における大人の役割だと思います。しかし、「根っこ」は私たちに見ることができません。ですから不安になります。焦ったりもします。でも全神経を集中して子どもをよく見ると「根っこ」が育っているかどうか分かります。

私が赴任してすぐにしたことは「自由遊び」を「自発活動」とし、時間を一時間延長したことです。今年の卒園生は三年間、これを積み重ねて過ごしました。それまでより年間約一七〇時間、三年間で約五〇〇時間「自発活動」の時間が増えたわけです。保護者の皆さんから様々なご意見も頂戴しました。「保育園とかわらないではないか」というご不満もお聞きしました。園長として、正直内心穏やかではありませんでしたが、子どもたちが必ず結果を出してくれると信じ継続してきました。保育者も研鑽を重ね、この改革の成果をその都度その都度確認してきました。「根っこ」が育つことと自発性がついていくことには深い関係があります。自分で見通しを立て、自分で考え、自分の意見をいい、それらを自分たちで調整しながら活動する姿が、特に今年の卒園生に際立ってみてとることができます。保育者も実感していま

す。大切な「根っこ」が着実に育っていると確信しています。

これから的人生いろいろな困難もあるかも知れませんが、そんなとき保護者の皆様も子どもたちも水口幼稚園を思い起こして下さり、ここにひょっこっと顔を出してください。いつも待っています。「根っこ」が育ったところなのですから…。最後にもう一度、御卒業おめでとうございます。

#### 2004年度年間目標 「共に育つ」

ご入園ご進級おめでとうございます。

2004年度の年間目標を「共に育つ」としました。子どもばかりに成長を押しつけるのではなく、子どもも大人（保育者と保護者）も共に育ちあいたいとの願いからです。幼児教育でもっとも大切なことは「根っこ」を育てることです。心を育てると言ってもいいですし、人生の土台（基礎）をつくると言い換えてもいいと思います。外から「見えない」部分が育っていくことが幼児期の保育目標です。大人はとかく「見える」部分に心を奪われがちです。しかし、幼児期の今「根っこ」「土台」が形成されなければなりません。このような理解を子どもの身边にいる大人がしっかりと持つことが大切です。

先日、ある研修会で「幼児教育に到達目標はいらない。必要なのは方向目標である」と聞きました。到達目標というのは、最低限ここまでという具体的な内容が設定されている目標のことです。たとえば1ケタの足し算ができるとか、ひらがなが書けるという目標のことです。挨拶でいえば「おはよう・こんにちは・こんばんはの使い分けができる」「相手の目を見てから大きな声でお辞儀をしてあいさつする」という身につけるべき獲得目標のことです。それに対して方向目標というのは、数や文字に関心を持つようになるという目標です。挨拶の仕方はどうであっても、挨拶してみようとするという方向を向ければそれでよいのです。方向目標は主体性・自発性が育つように、保育目標に方向性だけを示し、ここまでという限定のない目標です。幼児教育にはこの方向目標がふさわしいと私も思います。子どもが朝元気よく「エンチョー、オハヨー」といってくれたのを大

人が「園長先生おはようございます、デショ！」と注意する場面によく出くわします。方向目標として挨拶をとらえておけば言いなおさせる必要はありません。また鏡文字を注意したり、小さな表現方法をおおしたりすることで、子どもの自発性の芽を摘むことを大人が日常的にやってしまっていることも少なくありません。

幼児は教え込めば教え込んだだけのことができるようになります。しかし、到達目標を設定して訓練するだけでは「見えない部分」（心＝自発性・主体性・創造性）は育ちません。到達目標は時間割で区切られた小・中学校教育にはふさわしくても、成育段階に個人差の大きい幼児教育にはなじみません。

ではどのような方向で育てばよいでしょうか。よく引用させていただいてますが、15年ほど前のベストセラーで『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』というアメリカの牧師が書いた本がその方向を示していると思います。「人間、どう生きるか、どのようにふるまい、どんな気持ちで日々を送ればいいか、本当に知っているくてはならないことを、わたしは全部残らず幼稚園で教わった。人生の知恵は大学院という山のてっぺんにあるのではなく、日曜学校の砂場に埋まっていたのである。わたしはそこで何を学んだろうか。何でもみんなで分け合うこと。するをしないこと。人をぶたないこと。使ったものはかならずもとのところに戻すこと。ちらかしたら自分で後片付けをすること。人のものに手を出さないこと。誰かを傷つけたら、ごめんなさい、と言うこと。食事の前に手を洗うこと。トイレに行ったらちゃんと水を流すこと。（中略）不思議だな、と思う気持ちを大切にすること。」たわいない文章だが、幼児教育の方向目標を示していると思います。

到達（獲得）目標を設定して子どもを追い立て、大人も焦って育つのではなく、3・4・5歳というこの時、方向を見定めて、子どもの主体性・自発性が育つように、そして大人もそのような理解を深めていくことができるよう、共に育ち合いたいと思います。

皆さんと共に、この一年間歩んでまいりたいと思います。よろしくお願ひします。

## 2004年度 卒園文集から

ご卒業おめでとうございます。

三年あるいは二年間、園長として何程のことができたかと自省しています。しかし、私の非力にもかかわらず神様が子どもたちをしっかりと守り育んでくださったという事実を今年もまた強く感じております。

「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」（コリントの信徒への手紙Ⅰ三・六～七）。この聖書のことばを卒園文集で贈らせていただいて四年目になります。私たち人間の力不足や一生懸命さを越えて、神様が責任を持って子どもたちを成長させてくださることです。子育ての一翼を担っているものとしてこの認識は大切なことだと思っています。

幼児教育は「根っこ」を育てる事だ、と機会あるごとに申し上げてまいりました。「根っこ」が育たなければ芽を出しても枯れてしまいます。風が吹けば倒れてしまいます。実ったとしてもその重さに堪えられるような茎が育ちません。急がずに、いま必要な養分を見きわめ、それを吸収し易いようにしっかりと与えていくことが幼児教育における大人の役割だと思います。しかし、「根っこ」は外から見えません。ですから不安になります。焦ったりもします。でも全神経を集中して子どもをよく見ると「根っこ」が育っていることが分かります。

「根っこ」が育つことと自発性がついていくことには深い関係があります。卒園生たちは、いつのまにか自分で見通しを立て、自分で考え、自分の意見をいい、それらを自分たちで調整しながら活動できるようになっています。大切な「根っこ」が着実に育っている証だと思います。保育者もそれを実感しています。

今年の卒園生の中に、年中・年長の二年間で一回しか休んでいないお子さんがいます。すごいと思います。ご本人の頑張りもさることながら、保護者のご努力に敬服します。「～～ができるようになった」「こんなに成長した」……日常的で地道な積み重ねがあってのことです。「根っこ」に

は継続的な養分が不可欠です。日常の何気ない毎日の繰り返しが「根っこ」を育てると思います。昔、私が小学校の通信簿を見せたときに、母はまず最初に学習成績欄を見て「今度は頑張ろうね」と評価しました。しかし、祖母は出欠欄を最初に見て「休まずに行けて偉いねえ～」とほめてくれました。やけに嬉しくなってやる気が出たことを思い出します。祖母は子育ての中で（大げさに言えば人生で）何が大切かを経験的に知っていたのだと思います。祖母は目に見える結果よりも目に見えない過程を評価してくれたのです。

水口幼稚園に連なった私たち（子ども・保護者・職員）は、これからも目に見えないものを大切にしながら生きていきたいと思います。今の時代だからなおさら大切なことだと感じています。何かあったとき水口幼稚園を思い起こして下さり、ここにひょこっと顔を出してください。いつも待っています。「根っこ」が育ったところなのですから…。

## 2005年度年間目標 「心が育つ」

ご入園、ご進級おめでとうございます。

2005年度の保育の年間目標を「心が育つ」としました。幼児教育でもっとも大切なことは「根っこ」が育つことです。人生の土台（基礎）ができると言い換えてもいいと思います。いずれにしても外から「見えない」部分が育っていくことが幼児期の保育目標です。とかく人は「見える」部分に心を奪われがちです。しかし、幼児期の今「根っこ」「土台」が形成されなければなりません。このような理解を子どもの身近にいる大人がしっかりと持つことが大切です。

「心を育てる」ではなくて「心が育つ」としたことにも大きな意味があります。先日、京都の植木職人で16代佐野藤右衛門さんという方の発言を聞いて考えさせられました。彼は祖父の代からの「桜守」を継ぎ、円山公園のしだれ桜をはじめ全国・全世界の桜を守っているそうです。彼は「最近は『子育て』という言葉が氾濫している。『子守』はいなくなってしまった。子どもが本来もっている力が發揮されるように、子どもをいくしみ守っていく、そういう親がいなくなった。

桜の樹も『育てよう』という考えではなく、桜の木の力やまわりの環境を『守る』ことが大切だ。親は傲慢にならずもっと『子守』をすべきではないか」というようなことを話されていました。確かに幼稚園も含め「子育て」という言葉が氾濫していることに気づかされました。そして確かにその言葉には大人の傲慢さが入っていることに気づきました。大人が「育て」、子どもは「育てられる」ことを前提にしています。「子育て」とい 「親育ち」と言っています。「子育て」の情報が氾濫している今だからこそ私たちはもう一度子どもの成長する力そのものに信頼したいと思います。「心を育てる」のではなく「心が育つ」のだということを確認したいと思います。

卒園文集で「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」（コリントの信徒への手紙 13・6-7）という聖書のことばを贈らせて頂きました。人間の力不足や一生懸命さを越えて、神様が責任を持って子どもたちを成長させてくださると理解できます。子どもの育ちに関わっているものとしてこの認識が大切であることを「桜守」の話からも改めて思わされました。子どもたちが与えられている賜物に注視して保育したいと思っています。子どもには成長する力が備わっています。その力を損なわず、充分に發揮されるよう最善をつくしたいと思います。しなければならないことはそんなに多くはありません。子どもの育つ力に信頼を置くことです。

20年ほど前のベストセラーで『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』というアメリカの牧師が書いた本から紹介します。「人間、どう生きるか、どのようにふるまい、どんな気持ちで日々を送ればいいか、本当に知っているなくてはならないことを、わたしは全部残らず幼稚園で教わった。人生の知恵は大学院という山のてっぺんにあるのではなく、日曜学校の砂場に埋まっていたのである。わたしはそこで何を学んだろうか。何でもみんなで分け合うこと。するをしないこと。人をぶたないこと。使ったものはかならずもとのところに戻すこと。ちらかしたら自分で後片付け

をすること。人のものに手を出さないこと。誰かを傷つけたら、ごめんなさい、と言うこと。食事の前に手を洗うこと。トイレに行ったらちゃんと水を流すこと。（中略）不思議だな、と思う気持ちを大切にすること。（略）」たわいのない文章だが、真理があると思います。子どものもっている「必ず育ち行く力」を見据えて保育にあたってまいります。

保護者の皆さんと共に、一年間歩んでまいりたいと思います。よろしくお願ひします。

## 2005年度 卒園文集から

ご卒業おめでとうございます。

これを書いているのは1月25日です（史上最速の卒業祝いになりそうです）。春は遠くまだまだです。今年度は厳冬で全国各地で豪雪による被害がでました。心痛みます。私が生まれ育った秋田では87年ぶりの大雪と聞きました。つまり実質的には誰も経験したことのない冬だったのです。初体験というのは不安なものです。見舞いの電話を入れたら年老いた母は「もう、笑うしかない。笑って春を待つしかない」と妙に明るく話してくれました。不安の中で必ず春がくることを信じて希望をもって明るく待つ……そういうえば、園入口のもくれんの蕾もこの寒さのなかで、すでに春を待って膨らんできています。二つのことは確信をもって成長を待つ「子育て」と通ずるところがあるよう思います。

2月号の「もくれん」で少しに触れましたが、マリア・モンテッソーリ（1870年8月31日～1952年5月6日）の教育のねらいを改めてたどってみて、水口幼稚園の保育が間違いないことをさらに確信しました。モンテッソーリは、子どもは「自らを成長・発達させる力をもって生まれてくる」と理解します。最近はやりの認知科学でも同じようなことを言っているようですが、要するに、皆それぞれ、かけがえのない賜物をもって生まれてくるのです。そして大人（親や教師）を「その子どもの要求を汲み取り、自由を保障し、子どもたちの自発的な活動を援助する存在に徹しなければならない」と規定します。主人公は子どもであり、子どもの自発的な活動（成長）を助けるのが大人の

役割なのです。そのために子どもの自発性を重んじ好きなだけ活動することを大切にします。水口幼稚園の『一人ひとりをたいせつに 自由にのびやかに』は、モンテッソーリから見ても的を射ていると自画自賛してしまいます。このためにあらゆる環境を整えていくことが園長の仕事と自負してきました。しかし、何程のことができたかと反省することも仕切りです。

卒園文集で毎年聖書から同じ言葉を贈らせて頂いています。私の非力にもかかわらず神様が子どもをしっかりと守り育んでくださったという事実を毎年、強く感じるからです。

「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」（コリントの信徒への手紙13・6～7）。私たち人間の力不足や一生懸命さを越えて、神様が責任を持って人を成長させてくださることを私たち大人は忘れてはいけないと思います。モンテッソーリ教育の人間観とも通じています。聖書は約2,000年前の言葉、モンテッソーリ教育も100年前の理論です。しかし、どんなに時代が変化しようとも、時や空間を越えて、人間として、ぶれてはならない価値観、変えてはならない価値観のようなものがあると思います。春が必ずくるように…冬の寒いときに木々の蕾が膨らむように…親が子を愛するように…。そのような普遍の価値観を受け入れる人間でありたいと思います。

幼児教育は「根っこ」を育てることです。「根っこ」が育たなければ芽を出しても枯れてしまします。風が吹けば倒れてしまいます。実ったとしてもその重さに堪えられるような茎が育ちません。急がずに、いま必要な養分を見きわめ、それを吸収し易いようにしっかりと与えていくことが幼児教育における大人の役割です。外から成長はみえませんが、全神経を集中して子どもをよく見ると「根っこ」が育っていることが分かります。

今年の卒園生36名も、いつのまにか自分で見通しを立て、自分で考え、自分の意見をいい、それらを自分たちで調整しながら活動できるようになっています。大切な「根っこ」が着実に育っています。

す。保育者もそれを実感しています。卒園心からおめでとうございます。

水口幼稚園に連なった私たち（子ども・保護者・職員）は、これからも目に見えないものを大切にしながら生きていきましょう。世界の状況を判断すると、様々なことが分岐点に差しかかっている時代にあると実感しています。だから尚更、ぶれさせてはいけない価値観を大切に子どもに伝えたいと痛感します。つまずいたとき、大きな流れに押し流されそうになったとき、大事なものを見失いそうになったとき水口幼稚園（水口教会）を思い起こして下さり、保護者の方もひょっこり顔を見せてください。いつも待っています。大人も子どもも共に「根っこ」が育ったところなのですから…。

## 2006年度年間目標 「生命輝く」

ご入園・ご進級おめでとうございます。

大人の心配をよそに、新入園児たちは例年にもまして無理なく園生活に慣れてくださっているようです。「縦割り」保育の成果が出ていると思います。在園児の自覚のめばえも実感します。

さて、2006年度の年間目標を「生命輝く」としました。この年目標は2003年度のものです。3年前のこの欄に次のようなことを書きました。「職員会で年間目標について話し合っている最中の3月20日午前、僕たちの祈りにも関わらず、米英のイラク攻撃が始まってしまいました。ショックを受けました。戦争で犠牲になるのは、常に女性・高齢者・子ども・しょうがい者など社会的な弱者です。水口幼稚園ばかりではなく、イラクの、そして世界の子どもの『いのち』が決してそこなわれることなく、それを輝かしてくださるようにと祈りをこめて年間目標を掲げました。…僕は、昨年度の卒園式（3月15日）のあと、保護者の皆さんへの謝辞と共に『アメリカのイラク攻撃が決して実行されないよう、祈りましょう。もし、こんな理不尽なことが実行されたら私たちは教育の現場にいさせてもらっている者として、また大人として、子どもたちにどう説明できるでしょうか…。実行されてしまったら来年度、大人として恥ずかしくて子どもたちの前に立つことが

できない気分になります』というようなことを申し上げました。にもかかわらず、戦争が始まり、新学期がやってきました。水口の子どもたちの顔と戦時下のイラクの子どもたちの顔がダブって見えてしまいます。とても悲しい気になります。いのちをいとおしみ、すべての子どものいのちが輝くことができるよう、この水口幼稚園で園長としてなすべきことをなしていきたいと思っています」。この決意も虚しくこの3年間で多くの子どもが犠牲になり、それどころか、日本政府もこの戦争に協力してきました。そして今もそれがさらに悲惨な形で続いている。当たり前のことがですが、神様からいただいた「生命」はひとつも欠けてはならないのです。どの「生命」も一つひとつみな大切です。

一つひとつの「生命」が輝くためには、違いを認め合い、受け入れ合うことが大切です。この欄で紹介したいと思い、絶版のため少し高価でしたが古本で「復興期の精神」（花田清輝）を求めました。この中に「橢円幻想」という短文があります。花田が戦時中書いたものです。一つの同じ思想・一つの同じ行動しか認められない戦時下にあって、花田は、中心点が一つしかない〈円〉よりも、二つの焦点をもつ〈橢円〉の魅力を次のように語っています。「橢円は、焦点の位置次第で、無限に円に近づくこともできれば、直線に近づくこともできようが、その形がいかに変化しようとも、依然として、橢円が橢円である限り、それは、醒めながら眠り、眠りながら醒め、泣きながら笑い、笑いながら泣き、信じながら疑い、疑いながら信することを意味する。これが曖昧であり、なにか有り得べからざるもののように思われ、しかも、みにくい印象を君にあたえるとすれば、それは君が、いまなお、円の亡靈に憑かれているためであろう。（略）円は、むしろ、橢円のなかのきわめて特殊のばあい（略）にすぎず、橢円のほうが、円よりも、はるかに一般的な存在であるともいえる」。少し難解なところもあるが、要するに中心は一つではないということ、円は「きわめて特殊な橢円であること、もう一つの異なる焦点に同じような力が与えられなければならないこと、そうしたときにいびつな円が、もっと自然で「はるか

に一般的な」橢円によみがえる、というようなことを言っているわけです。円が完全だと思ってしまうのは円の亡靈にとりつかれているというのです。これを戦時中書いたことは驚きです。一つの中心で車座になり、一つの同じ思想・同じ行動が求められるとき、戦争が起こります。そうではなく焦点が二つある橢円的な共同体を模索していくことが平和への志向であり、違いを認め合い、一人ひとりをたいせつにし、すべての「生命」を慈しむことに通じると思います。

車座になって、群れたときに、そこからはみ出してしまった人がいることを大人も子どもも決して忘れてはならないと思います。それを忘れないでいることが「生命輝く」ことに通じることになります。神様によって与えられた一人ひとりのどの「生命」もまちがいなく「はなはだよし」とされていることが、幼児期の心にしみこんでくれればと願っています。大人も子どもも一人ひとりのいのちが輝いています。そのことに目を向けて保育に携わってまいりたいと心を新たにしています。

保護者の皆様と共に、一年間歩んでまいります。よろしくお願いします。

## 2006年度 卒園文集から 06年度 ご卒業おめでとうございます。

今日は、1月26日です。卒園式までは、保育日数でいうとあと30日程です。卒園生に何程のことができたのだろうかと3年間を思い起こし反省しております。今、隣のすみれ組保育室では、子どもたちが元気に「カレンダーマーチ」を歌っています。一年たったら、またおいで～♪の歌詞が感傷的に響いてきます。エンチョーは・何年たっても、またおいで～♪と歌いたい気分です。

幼稚園は今年の5月5日に創立70周年を迎えます。今年の卒園生は丁度70期生です。これまで2,587名の方が卒業されました。70期生のこれから的人生は、僕がいまでもなく、山あり谷ありだと思います。嫌なこと・辛いこともあるでしょう。そういうときに幼稚園で育まれた「根っこ」が、課題を乗り越える源となると信じています。辛いときには、幼稚園に戻ってきてほしいと心から思っています。

数年前の土曜日、中年の女性が幼稚園を訪ねてこられました。「こここの卒園生なので幼稚園を見せてほしい」と頼まれました。僕は多くを聞かずに案内しました。園舎は改築されていましたので当時とは違っているはずです。にもかかわらず彼女は、懐かしそうに園舎の中を見渡していました。そして「椅子に座っていいですか」と言って腰掛け、何か物思いにふけっているようでした。僕は昔使っていた園児椅子があるのを想い出し「たぶんこれが当時使っていた椅子ではないでしょうか」とその椅子を差し出しました。彼女は「あったんですか……」といってそれに腰掛け「小さかったんですね……」とポツリとつぶやいて、あとは涙を流しておられました。しばらくの沈黙があり「今日は本当にありがとうございました」と晴々した表情で帰って行かれました。不思議な時間でした。人生で行き詰まりを感じおられたのかもしれません。辛いことがあったとき幼稚園に帰ってきてそこで元気をもらう、そんなことが大人になってもあるんだなあ、と思わされました。何があっても幼稚園がたち続ける責任を痛感した一時でした。

そいえば、ひまわりの前の廊下に点灯しないライトがかかっているのを気づいていますか。旧園舎を照らし続けたライトを新園舎に残したのです。これを見て、元気をもらう卒園生もいるだろうと……。

一昨年には、入り口のもくれんの木を「まだ残ってたんだ～。大きくなったね。」と撫でるように懐かしがっていた50代の卒園生の姿をも垣間見ました。この幼稚園で「根っこ」が育まれたことを想い出されたのでしょうか。

嫌なことがあったり、行き詰まつたらいつでも戻つておいでと70期生のみんなに伝えたいと思います。ここで、「人生に必要な智恵」を身につけたのですから…。

ところで、卒園文集で毎年聖書から同じ言葉を贈らせて頂いています。私の非力にもかかわらず神様が子どもをしっかりと守り育んでくださったという事実を毎年、強く感じるからです。

「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」(コリントの信徒への手紙13・6～7)。私たち人間の力不足や一生懸命さを越えて、

神様が責任をもって人を成長させてくださることを私たち大人は忘れてはいけないと思います。どんなに時代が変化しようと、時や空間を越えて、人間として、ぶれてはならない価値観、変えてはならない価値観のようなものがあると思います。それをいつも思い起こすことができるような幼稚園でいたいと思います。そのような普遍の価値観を受け入れる人間でありたいと思います。

幼児教育は「根っこ」を育てることです。「根っこ」が育たなければ芽を出しても枯れてしまいます。風が吹けば倒れてしまいます。実ったとしてもその重さに堪えられるような茎が育ちません。急がずに、いま必要な養分を見きわめ、それを吸収し易いようにしっかりと与えていくことが幼児教育における大人の役割です。「根っこ」の成長は外からみえませんが、全神経を集中して子どもをよく見ると「根っこ」が育っていることが分かります。

今年の卒園生27名も、いつのまにか自分で見通しを立て、自分で考え、自分の意見をいい、それらを自分たちで調整しながら活動できるようになっています。大切な「根っこ」が着実に育っています。保育者もそれを実感しています。心から卒園おめでとうございます。

つまずいたとき、大きな流れに押し流されそうになってしまったとき、大事なものの見失いそうになったとき水口幼稚園(水口教会)を思い起こして下さり、保護者の方もひょっこり顔を見せてください。いつも待っています。大人も子どもも共に「根っこ」が育ったところなのですから…。

## 2007年度年間目標 「ともに育つ」

ご入園・ご進級おめでとうございます。

2007年度の年間目標を「ともに育つ」としました。幼稚園には子ども・職員・そして保護者がいます。子どもばかりに成長を押しつけるのではなく、3者が影響しあい、刺激しあい、支えあいながら、ともに育てられ、成長したいとの願いからです。

「ともに育つ」にはもう一つの願いがこめられています。「見えるところ」だけではなくて「見えないところ」も、ともに育てられたい思うからです。幼児教育ではこの「見えないところ」を大切にします。「根っこ」とか「心」と言い換えててもよいかと思います。子どもたちは食前の祈りで「心もからだも大き

くしてください」と祈りますが、心とからだが「ともに育つ」ことが私たちの願いです。大人は、とかく「見える」部分に心を奪われがちです。しかし、幼児期の今は「根っこ」（こころ）が形成される時期です。このような理解や価値観を子どもの身近にいる私たちがしっかりと持つことが大切だと考えています。

聖路加国際病院名誉院長・理事長の日野原重明さん（95才）が、約20年前から小学3～4年生に「いのち」についての授業を始めました。その内容が最近「いのちのおはなし」※という絵本になりました。あとがきで日野原さんは「『いのち』は、だれにも平等にあります。1日1日の時間のなかに、いのちがあるのです。その時間をみんなのいのちとして、大切にしてほしいのです。」と書いています。そして「人が生きていくうえで、もうひとつ大事なことがあります。それは『こころ』です。おたがいに手をさしのべあって、いっしょに生きていくこと。こころを育てるとは、そういうことです。自分以外のことのために、自分の時間をつかおうとすることです。」（太字は谷村）と続けます。実に見事です。

水口幼稚園では近年3つの年間目標を掲げ保育をしてきました。「いのち輝く」「ともに育つ」「心が育つ」です。この3つの年間目標を日野原さんが一体のものとして説明してくれました。ともに生きること・いのちを大切にすること・こころが育つことが実は一体のことだということを短い文章でわかり易く見事に表現しています。彼は「いのちがある」とは「使う時間がある」ことだと理解し、その時間（いのち）を自分以外の他の人のために使おうとすることが「こころを育てる」ことだと考えます。そして「『いのち』や、いのちをどうつかおうかと決める『こころ』は見えませんが、見えないものこそ大切にすべきです。空気は見えませんが、人が生きるのに大切だということに似ています」と結んでいます。

日野原さんは牧師家庭で生まれ育ったキリスト者と聞いています。その影響か聖書のことをよくご存知のようです。聖書に「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」とあります。「いのち」

も「こころ」も「ともに」ということも目に見えません。今年度もそれらを大切にし、ともに支えあい、ともに成長させられ、ともに変えられていきたいと願っています。

今年度は、きりん組にKくんが入園しました。Kくんは、1歳を過ぎたころ脊髄性筋萎縮症を発症しました。有効な治療法はまだ確立されてないと聞きます。治療のため入退院を繰り返していますが、現在自分の力で座位を確保することはできません。そんなKくんがご両親と幼稚園に入園したいと希望されました。いろいろな工夫や支援が必要だろとは思いましたが、私は何のちゅうちよもなく入園を認めました。ともに生きる・ともに育つことが大切だと思ったからです。Kくんやそのご家族のためというより、むしろ私自身のため、水口幼稚園のために、他の子どもたちが成長するために、大切なことだと思ったからです。子どもたちは早速なかよくなっています。自分以外の他の人のためにいのち（時間）を使う人間に育てられたいと思います。Kくんが入園されたことはそのことにつながる喜ばしい出来事だと確信しています。ともに育てられ変えられていきたいと思います。

皆さんと共に、この一年間歩んでまいりたいと思います。よろしくお願ひします。

## 07年度 卒業文集から

卒園生の皆さん、そして保護者の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

園長として、何程のことができたのだろうかと3年間を思い起こし反省しております。個人的なことですが、とりわけこの3～4年は、公務が増えたのに加え、左右の順にいわゆる「50肩」を患い、激痛で日常生活にも差し障りがある状態で、子どもたちとも遊べなくなっていました。“ごめんね”と心の中で子どもたちにお詫びしています。子どもと遊ぶことが少なかったためか、僕の方は身体だけがブクブク大きく成長（？）し、それに反比例して、できることができどんどん少なくなってしまいました。そんな僕に反して、すみれ組の子どもたちは、在園中に心も身体も驚くほど成長し、できることもどんどん増えてきました。子どもの中に確かにある無限の可能性を実感しております。

特に内面の成長を感じており、うれしく思っています。困っている友だちに身を寄せていく心、時にはそれぞれ意見を言い合い、時には自分を抑えながら友だちと一つのことをなし遂げていく協調性、弱いものや小さい者をいたわろうする正義感、トラブルを自分たちで解決しようとする知恵と自主性、自分で遊びを深めていく自発性と創造性、人間（生命）ってかけがえのないものだと感じる心……。たくさんの目に見えないものが子どもたちの中に培われたと感じています。

さて、卒園文集で毎年聖書から同じ言葉を贈らせて頂いています。僕の非力にもかかわらず神が子どもをしっかりと守り育んでくださったという事実を毎年、強く感じるからです。

「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」（コリントの信徒への手紙 13・6～7）。

今年度、年中組に脊髄性筋萎縮症のKちゃんが入園しました。はじめの内は病気がちで中々登園できませんでしたが、園にも慣れ、体調も整えられ、第2保育期も半ばからは休まずに登園することができました。そんなある日、Kちゃんはお母さんに「イエスさまのおかげや」と話されたと聞きました。それまで病気がちで入退院を繰り返していましたが、初めて3ヶ月以上も入院せずに過ごせたことをKちゃんは「イエスさまのおかげや」と表現したのです。スゴイと思いました。入園前まで、ご家族の方の中で支えられながら過ごしてきたKちゃんは、お父さん・お母さん・きょうだい、あるいはお医者さん・看護師さんのおかげと考えることはあったと思います。しかし、身近な人だけではなく、それ以外の直接触れる事でのきない、目に見えない、自分では気づかない大きな力によって実は支えられていることをKちゃんは実感したのだと思います。それが「イエスさまのおかげや」という言葉に凝縮されたのだと思います。大げさに言うと人が生きる上での悟りにも似た境地だと思います。

Kちゃんにこのような心が育っているのだから、おそらく水口幼稚園の園児全員にも「人間は独りでは生きていけない。みんなで支え合うだけでも

生きていけない。自分たちが気づかないたくさん支えや力によって生かされている」という心が育っていると信じます。

先程の聖書の言葉をもう一度読んでみてください。僕たち人間の力には限界があります。その限界を越えて、神が責任をもって人を支え成長させていることを僕たちは忘れてはいけないと思います。どんなに時代が変化しようと、時や空間を越えて、人間として、ぶれてはならない価値観、変えてはならない価値観のようなものがこの言葉にはあると思います。それをいつも思い起こすことができるような幼稚園でいたいと思います。そのような普遍の価値観を受け入れる人間でありたいと思います。

幼児教育は「根っこ」を育てることです。「根っこ」が育たなければ芽を出しても枯れてしまいます。風が吹けば倒れてしまいます。しかし、充分な養分を得た「根っこ」は地にしっかりと根づき、たとえ風が吹いても、踏まれることがあっても、芳しい花を咲かせ、豊かな実をつけるのです。急がずに、いま必要な養分を見きわめ、それを吸収し易いようにしっかりと与えていくことが幼児教育における大人の役割です。「根っこ」の成長は外からみえませんが、全神経を集中して子どもをよく見ると「根っこ」が育っていることが分かります。

今年の卒園生32名も、大切な「根っこ」が着実に育っています。保育者もそれを実感しています。心から卒園おめでとうございます。保護者の皆さんには、その「根っこ」を信じて、卒園後も、あわてず焦らずじっくりと子どもたちの成長を見守っていただきたいと思います。

つまずいたとき、大きな流れに押し流されそうになったとき、大事な物を見失いそうになったとき水口幼稚園（水口教会）を思い起こし、保護者の方もひょっこり顔を見せてください。いつも待っています。大人も子どもも共に「根っこ」が育ったところなのですから…。

## 2008年度年間目標 「こころが育つ」

ご入園、ご進級おめでとうございます。

2008年度の保育の年間目標は「こころが育つ」です。二つのことを申し上げます。

まず第一に“見えない部分”が育つということについてです。幼児教育でもっとも大切なことは「根っこ」が育つことです。人生の土台（基礎）ができると言い換えてもいいと思います。「こころ」も「根っこ」も「土台」も外から“見えない”部分です。幼児期においてはこの“見えない”部分が育つことが大切です。大人はとかく“見える”部分を評価して一喜一憂してしまいます。「上手に絵や字がかけた」「〇×ができるようになった」「一番になった」……と。早期教育の流行はそんな大人の弱点をうまくすぐっています。しかし、幼児教育で大切なことは外からは“見えない”こころが育つことです。友だちと一緒にいることが楽しいと感じられるこころ、困っている友だちに身を寄せていくこころ、弱いものや小さい者をいたわろうするこころ、人間（生命）ってかけがえのないものだと感じるこころ、友だちのために時間を使うことを厭わないこころ、美しいものを見て美しいと感じるこころ、一つのことをなしとげるって面白いと思うこころ、いけないと感じないと感じるこころ……こういう“根っこ”は幼児期の今育つのです。根を張り、葉を繁らせ、花を咲かせ、実を結ぶのです。この順番を大人は間違えてはなりません。焦らずにじっくりと見えない部分が育つように待ちたいと思います。待つだけではなく、栄養が充分に行き渡るように子どもの環境を整えていくことが大人の役割です。このような理解を子どもの身近にいる大人がしっかりと持つことが大切です。

外からは見えない子どもの育つ力に信頼を置いて一年を過ごしたいと思います。25年ほど前のベストセラーで『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』というアメリカの牧師が書いた本から紹介します。「人間、どう生きるか、どのようにふるまい、どんな気持ちで日々を送ればいいか、本当に知りていなくてはならないことを、わたしは全部残らず幼稚園で教わった。人生の知恵は大学院という山のてっぺんにあるのではなく、日曜学校の砂場に埋まっていたのである。わたしはそこで何を学んだろうか。何でもみんなで分け合うこと。するをしないこと。人をぶたないこと。使ったものはかならずもとのところに戻すこと。ちらかしたら自分で後片付けをすること。人のも

のに手を出さないこと。誰かを傷つけたら、ごめんなさい、と言うこと。食事の前に手を洗うこと。トイレに行ったらちゃんと水を流すこと。（中略）不思議だな、と思う気持ちを大切にすること。（略）たわいのない文章だが、人生に必要な外からは見えない“根っこ”を見据えたいと思います。子どものもっている「必ず育ち行く力」を信じて保育にあたってまいります。

二つ目に「こころを育てる」ではなくて「こころが育つ」としたことについてです。京都の植木職人第16代佐野藤右衛門さんは祖父の代からの“桜守”を継ぎ、円山公園のしだれ桜をはじめ全国・全世界の桜を守っています。彼は「最近は『子育て』という言葉が氾濫している。『子守』はいなくなってしまった。子どもが本来もっている力が發揮されるように、子どもをいつくしみ守っていく、そういう親がいなくなった。桜の樹も『育てよう』という考え方ではなく、桜の木の力やまわりの環境を『守る』ことが大切だ。親は傲慢にならずもっと『子守』をすべきではないか」と言っています。確かに幼稚園も含め「子育て」という言葉が氾濫してしまっています。佐野さんから“子育て”という言葉には大人の傲慢さが入っていることに気づかされました。大人が“育て”子どもは“育てられる”ことを前提にしてしまっています。しかし実は子どもには自ら育つ力（賜物）が与えられているのです。その力が發揮されるような環境を守っていくことが大人の役目なのです。子どもの成長する力そのものに信頼し「心を育てる」のではなく「心が育つ」のだということを確認したいと思います。

子どもたちが与えられている外からは見えない賜物に注視して保育したいと思っています。子どもには成長する力が備わっています。その力を損なわず、充分に發揮されるよう環境を整備していきたいと思います。元東京都立大学総長の茂木俊彦さんは近著『障害児教育を考える』の中で「障害者が遭遇する活動制限や参加制約を限りなくゼロに近づけるために（中略）どう環境をととのえていくべきかを考える必要がある」と言っています。障害者を子どもと読み替えていいと思います。さまざまな制限・制約を乗り越えて、もともとある力が育っていくためには人的な環境も含め、子

どもの回りにいる大人が環境を整えていくことが大切です。

保護者の皆さんと共に、一年間歩んでまいりたいと思います。よろしくお願ひします。

## 08年度 卒業文集から

第72期生の卒園生の皆さん、そして保護者の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

今年の卒園生はバラエティに富んでます。在園年数一つとっても、4年間過ごされたお子さんから、転入のために5ヶ月で卒園されるお子さんまでいます。39の多様な賜物をもった子どもたちは、お互いに関わり合うことによって、僕たちに“共に生きること” “共に育つこと” “心が育つこと” そして “生命の大切さ” をあらゆる場面でその時々に明確に示してくれました。

きりん組のとき、こうちゃんが入園されました。御存知のようにこうちゃんは、脊髄性筋萎縮症という病気を抱えておられます。僕らに何か見通しがあったわけではありませんが、僕は喜んで入園を許可しました。その年の入園文集に僕は次のように書きました。「いろいろな工夫や支援が必要だろうとは思いましたが、私は何のちゅうちょもなく入園を認めました。ともに生きる・ともに育つことが大切だと思ったからです。Kくんやそのご家族のためというより、むしろ私自身のため、水口幼稚園のために、他の子どもたちが成長するために、大切なことだと思ったからです。子どもたちは早速なかよくなっています。自分以外の他の人のためにいのち（時間）を使う人間に育てられたいと思います。Kくんが入園されたことはそのことにつながる喜ばしい出来事だと確信しています。ともに育てられ変えられていきたいと思います。」と。

こうちゃんと過ごす中で、子どもたちは一人ひとりが自分のいのち（時間）を他者のために使い合って“共に生きる”ことを水口幼稚園で体験しました。この体験を通してみんなが育てられました。ももちゃんも、しょうちゃんも、りなちゃんも、ふうちゃんも、けんちゃんも、ここちゃんも、なっちゃんも、こうちゃんも、たかちゃんも、たつくも、みゅうちゃんも、りゅうりゅうも、そうやくんも、たくちゃんも、そうちゅんも、はるか

ちゃんも、かなたくんも、まおちゃんも、だいちゃんも、ゆうちゃんも、とらくんも、はるくんも、ゆうきくんも、きよちゃんも、りょうくんも、つうちゅんも、さらちゃんも、ことちゃんも、みっちゃんも、さっちゃんも、みさちゃんも、つきちゃんも、もっちゃんも、まなちゃんも、ゆきちゃんも、いずほくんも、つくしちゃんも、あいちゃんも、まゆちゃんも、39人みんなが育てられました。そして職員も変えられ育てられました。もちろん僕もです。保護者の皆様も同様のことと確信します。

たくさんの目に見えないものが子どもたちの中に培われたと実感しています。困っている友だちに身を寄せていく心、時には意見を言い合い時には自分を抑えながら友だちと一つのことをなし遂げていく協調性、弱い者や小さい者をいたわろうする正義感、トラブルを自分たちで解決しようとする知恵と自主性、自分で遊びを深めていく自発性と創造性、人間（生命）ってかけがえのないものだと感じる心……などなど。

幼児教育は“根っこ”を育てることです。“根っこ”が育たなければ芽を出しても枯れてしまいます。風が吹けば倒れてしまいます。しかし、充分な養分を得た“根っこ”は地にしっかりと根づき、たとえ風が吹いても、踏まれることがあっても、芳しい花を咲かせ、豊かな実をつけるのです。急がずに、いま必要な養分を見きわめ、それを吸収し易いようにしっかりと与えていくことが幼児教育における大人の役割です。“根っこ”的成長は外からみえませんが、全神経を集中して子どもをよく見ると“根っこ”が育っていることが分かります。卒園生には、大切な“根っこ”が着実に育っています。保育者もそれを実感しています。心から卒園おめでとうございます。保護者の皆さんには、その“根っこ”を信じて、卒園後も、あわてず焦らずじっくりと子どもたちの成長を見守っていただきたいと思います。

最後に一言添えます。卒園文集では聖書から毎年同じ言葉を贈らせて頂いています。僕の非力にもかかわらず神が子どもをしっかりと守り育んでもくださったという事実を、強く感じるからです。

「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大

切なのは植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」（コリントの信徒への手紙13・6～7）。

人間は独りでは生きていけません。みんなで支え合うだけでも生きていけません。自分たちが気づかないたくさんの支えや力によって生かされているのです。僕たち人間の力には限界があります。その限界を越えて、神が責任をもって人を支え成長させていることを聖書は語っています。どんなに時代が変化しようとも、時や空間を越えて、人間として、ぶれてはならない価値観、変えてはならない価値観のようなものがこの言葉にはあると思います。それをいつも思い起こすことができるような幼稚園でいたいと思います。このような価値観を受け入れる人間でありたいと思います。

つまずいたとき、大きな流れに押し流されそうになったとき、大事なものを見失いそうになったとき水口幼稚園（水口教会）を思い起し、保護者の方もひょっこり顔を見せてください。いつも待っています。大人も子どもも共に“根っこ”が育ったところなのですから…。【エンチョー（ボクシ） 谷村徳幸】

#### 09年度 年間目標「共に育つ」

2009年度の保育の年間目標は「共に育つ」になりました。“なりました”というのは、職員会で討論して決定したからです。この10年くらい水口幼稚園では「イノチカガヤク」「ココロガソダツ」「トモニソダツ」の3つの目標を漢字とひらがなを使い分けて順繰りに掲げてきました。この3つは有機的につながっています（07年度文集をご覧ください。日野原重明さんが言っています。お読みになりたい方はエンチョーまで）。ですから今年度は順番でいうと「イノチカガヤク」の年だったのですが、職員会では、順番どおりにすべきだという意見は全くありませんでした。職員としても保育者としても教師としても人間としても、一昨年度、昨年度の幼稚園での経験が大きかったと感じていたからです。

昨年度卒園された“先天性筋萎縮症”的Kくんと一緒に過ごした2年間、「共に育つ」ことを生活や保育の細部にわたって具体的に問われ、「共に生きる」とはどういうことかを一人ひとりの職

員が具体的に考えさせられました。その経験を活かしてこの一年も保育をすることが必要だとみんなが考えていました。「共に生きる」「自分を生きる」「ありのままと一緒に生きる」「ありのまま育つ」……などが候補としてあがりました。それぞれに思い入れがあり意味があります。それを出し合いながら、どれが水口幼稚園の年間目標にふさわしいか議論しました。すべてに捨てがたい思いや意味がありましたが結果「共に育つ」になりました。その際、いくつかのことを確認し合いました。

ひとつは“共に”ということです。“共に”は“一緒に”とも言い換えられます。しかし“一緒”には“一緒くた”という言い方があるように“ひとまとまり”とか“同じ”という意味があります。“共に育つ”は“多くのものがひとまとまりになって育つ”ことでも“みんな同じようになる”ことでもありません。“みんな一緒”は“みんな同じ”ではないのです。「共に育つ」は88人の子どもがいれば、ひとつの環境に一緒くたに子どもを合わせさせて同じように育てるということではありません。そうではなく88人の一人ひとりの個性とニーズに合わせて、保育の環境が変えられていく、大人の思い込みが変えられいくということです。職員はそれを昨年、一昨年と実感したのでした。インクルージョン教育……まさしくそれです。内包教育とか訳されたりしますが、“共生”教育ということができます。子どもも大人も、“しょうがい”的なものもないものも、高齢者も赤ちゃんも、共に（一緒に）生きていくために、生きている環境が変えられていく……そして一人ひとりも変えられながら生きていく……そんな出来事を、この水口幼稚園で具体的に体験できたことを確認しました。そして今年度もそのことを目指していくと職員一同決意しました。究極の理念かもしれません。

もう一つ確認したことは“一人ひとりを大切に”する結果として“みんな一緒に”を実現したいということです。もちろんここでの“一緒”は“同じ”ではなく“共に”という意味です。これを実現しようとするとき集団のどこに標準をおいて保育していくのかということを確認しました。これまでの学校教育では“そこそこできるところ”に

標準をおいて教育がなされてきたように感じます。

“できない子”は従って落ちこぼされてしまうわけです。教師は教師で“できない子”を落ちこぼしてはならないと考える一方で、クラス全体をも前進させなければと葛藤するわけです。そこで

“そこそこできる子”に基準を合わせ“できない子”に後ろ髪を引かれつつもみんなで前進することにします。結果として“みんな一緒に”ではなくなってしまいます。水口幼稚園の保育は一人ひとりすべての子どもに標準をおきます。前述のＫくんと他児との関わりからもそれは明らかです。ボクは牧師もやっていますので聖書から引用します。「『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる』。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。」。弱いところに神の力が表われるというのです。ボクらはそのことを保育の現場で経験し、実感しました。

“みんな一緒に”を実現するために最も弱いところに大いなる力が表われることを確信して保育をしていくことを職員一同確認しました。

すべてではありませんが、以上がボクらが「共に育つ」を年間目標にした意味です。“一人ひとりを大切に”、その先に異なる個性が“みんなと一緒に”助け合い、支えあってひとつのことをしていくような1年間、2年間、いや3年間にしたいと思っています。

さまざまな制限・制約を乗り越えて、もともと与えられてある力が育っていくために人的な環境も含め、子どもの周りにいる大人が環境を整えていくことにつとめてまいります。

保護者の皆さんと共に育ちながら、一年間歩んでまいりたいと思います。よろしくお願いします。

#### 大型木製遊具“冒険の森”について

☆風のとう→高さ約5m。栗の木でできた3層のやぐら

☆陽だまりのいえ→高さ約3mのやぐらの上の木の家（壁は2期工事）

☆虹のはし→“風のとう”と“陽だまりのいえ”をつなぐつり橋

☆子どものあそびば→一坪ほどの木の家

☆キジムナーの木→4本の杉をくりぬいた不思議な空間（2階図書室）

#### エンチヨーの“冒険の森”への思い

今、公園等で事故が起こるたびに子どもがわくわくするような遊具が撤去されています。学校や園でも子ども心を夢と冒険に駆り立てるような遊具がなくなりつつあります。僕はそのような子ども状況を陰ながら憂えてきました。

そこで、子どもの冒険心と挑戦心とわくわく感を刺激するような大型木製遊具を作ることにしました。地上5mの“風のとう”は子どもには危険すぎると大人は考えるかもしれません。しかし、危険には、自ら管理し乗り越えていくべきもの（リスク）と、大人の責任で絶対に回避してやらなければならないもの（ハザード）があるといわれています。“冒険の森”は基本的に自分の責任で遊ぶことを前提にします。ハザードは除去しますが、リスクは子ども自身が経験の積み重ねの中で自らの判断と力で乗り越えて行くべきものと考えています。“冒険の森”はそのような遊具です。

また、4本の杉をくり抜いて“キジムナーの木”として不思議な空間を創り出して図書室に置きます。子どもにはその空間で想像力を養ってもらいたいと思っています。

これらの遊具が放課後クラブとして小学生にも利用してもらいたいという構想もあります。これらの遊具で遊ぶことを通して、助け合うこと、あきらめないで挑戦すること、自分の責任で行動す

ること、見えないものを想像すること、加えて基本的な体力が育まれることを願っています。